朴景利生誕100周年記念特集

『市民時代』2026年10月号 掲載記事 日本語訳

特集①・②・④

翻訳資料提供：ハドン本屋 カン・ソンホ

※記事本文は提供された日本語原稿をもとに統合しています。

目次

朴景利生誕100周年特集①
生誕100年、あらためて出会う朴景利

統営、原州、晋州、ソウル、そして釜山

朴景利生誕100周年特集②
朴景利生誕100周年、ハドン26土地研究会がつなぐ「暮らしのなかの文学」

――読み、歩き、分かち合い、演じながら、『土地』を人生へとつなぐハドンの人々

朴景利生誕100周年特集④
日本へ渡った朴景利の『土地』

日本語版全20巻完訳、10年にわたる文学的な大事業

『市民時代』2026年10月号

朴景利生誕100周年特集①

生誕100年、あらためて出会う朴景利

統営、原州、晋州、ソウル、そして釜山

『土地』は完結した。しかし、朴景利は今も私たちのそばにいる

編集部

2026年は、韓国文学史において特別な年である。大河小説『土地』の作家、朴景利が生まれてから、ちょうど100年を迎えるからだ。1926年、慶尚南道統営に生まれ、2008年に世を去った朴景利は、単なる一作家の名を超え、韓国現代史の苦難と韓国人の生命力を文学として記録した象徴的な存在となった。なかでも大河小説『土地』は、一つの家族の栄枯盛衰にとどまらず、日本の植民地支配期と近代化の激動を生き抜いた韓国人の人生を、壮大な物語として描き出した作品である。

生誕100周年を迎えた2026年、韓国各地では朴景利の生涯と文学をあらためて振り返る催しが続いた。そのなかでも8月は特別だった。朴景利が生まれた統営、『土地』を完成させ、晩年を過ごした原州、そして若き日の暮らしの足跡が残るソウルで、それぞれ異なる形で朴景利と出会う催しが開かれたのである。

朴景利文学を理解するには、まず統営を訪ねる必要がある。海や路地、市場や人々、そして統営ならではの言葉や風土が、後の彼女の文学世界に深く染み込んでいるからだ。とりわけ『金薬局の娘たち』は、統営という土地を抜きにしては考えにくい作品である。そうした意味で、統営で開かれた生誕100周年記念行事は、単なる作家の記念行事ではなかった。故郷が自らの作家とあらためて出会う場だったのである。

統営市は8月の1か月間、「朴景利生誕100周年テーマ行事」を開催した。特別講演から読書プログラム、作品展示、書き写し体験、子ども向けクイズ、朴景利記念館の見学まで、市民がさまざまな方法で朴景利文学に触れられる機会を設けた。

8月8日、統営市立図書館では、土地学会会長の李承潤（イ・スンユン）教授が「朴景利、人生から『土地』へ」と題して特別講演を行った。一人の人間としての朴景利の人生が、いかにして韓国文学を代表する大河小説『土地』へと結実したのかをたどる講演だった。

とりわけ注目されたのは、朴景利を本の中だけに閉じ込めなかったことだ。8月1日から23日まで、統営市立図書館、忠武図書館、クミラン図書館では、朴景利の遺稿詩集『生きるという悲しみ』を書き写す体験や主要作品の展示、子ども向けのクイズプログラムが実施された。

『生きるという悲しみ』は、生誕100周年に合わせて2026年3月に刊行された特別な本である。土地文化財団が所蔵する資料のなかから見つかった未公開の遺稿詩47編を収録している。壮大な物語を描いた作家の陰に隠れていた、一人の人間の孤独や悲しみ、自然や生命に対する思いに触れられるという点で、大きな意味を持つ。

8月22日には、さらに特別な催しが開かれた。「朴景利の道を歩く」である。参加者は統営の朴景利記念館を訪れ、文化観光解説士の説明を聞きながら、作家の足跡をたどった。その後、「朴景利の人生と文学、そして統営」をテーマとする特別講演も行われた。

文学は、机の上だけで生まれるものではない。作家が目にした海、歩いた路地、耳にした方言、幼い頃に出会った人々。そのすべてが文学の種になる。そうした意味で、朴景利の故郷を歩くことは、『土地』や『金薬局の娘たち』の文章がどこから生まれたのかを探ることでもある。

次の世代を朴景利文学へと招き入れるプログラムにも意義があった。8月22日と29日、忠武図書館では、小学4〜6年生を対象に「作家朴景利に出会い、『天の川』を読む」というプログラムが開かれた。子どもたちは作品を読むだけでなく、登場人物との仮想インタビューなどを通じて、朴景利の生涯や作品の時代背景を学んだ。100年前に

生まれた作家が、21世紀の子どもたちと再び出会ったのである。

朴景利先生が高等教育を受けた晋州では、晋州文化の象徴ともいえる書店「晋州文庫」（代表・呂泰勲）が、書家の朴明圭先生による「朴景利先生の語録」を書作品として表現した書道展と、「朴景利先生生誕100周年記念」学術行事を開催した。

原州では、『土地』が舞踊作品として生まれ変わった。統営が朴景利の出発点であるなら、原州は彼女の文学が完成した場所である。朴景利は原州で長年暮らし、『土地』の最終部分を執筆した。そのため、原州では朴景利と『土地』を切り離して考えることはできない。

2026年8月15日、原州の雉岳芸術館では、生誕100周年を記念する舞踊劇『土地―舞・声・調和』が午後3時と7時の2回にわたって上演された。小説『土地』第1部をもとに、膨大な文字による物語を舞踊と音楽であらためて表現した作品である。

作品に込められた恨（ハン）を希望へ、憐れみを生命の主体的な力へと昇華させながら、民族の物語と時代の記録、韓国人のアイデンティティーを舞台上に表そうとした。

上演日が8月15日だったことにも、深い意味がある。光復節、すなわち日本の植民地支配からの解放を記念する日であると同時に、朴景利が大河小説『土地』を脱稿した日でもあるからだ。原州市はまさにその日を選び、『土地』を舞踊作品として再び舞台に上げた。

『土地』が文字から舞踊へと姿を変えたことも興味深い。古典が生き続けるためには、世代ごとに新しい言語へと翻訳されなければならない。小説を読んだことのない若い世代も、音楽や舞踊を通して『土地』に出会うことができるからだ。

8月19日には、ソウルでもう一つの意義深い動きがあった。ウリ銀行が土地文化財団と朴景利生誕100周年を記念する文化協力協約を締結し、『土地』の英語翻訳・出版を支援することを決めたのである。ウリ銀行の歴史館「ウリ1899」では、朴景利に関する特別展も開催された。

この催しは、ほかの記念行事とは少し性格が異なる。統営が朴景利のルーツを探る場所であり、原州が『土地』の完成をたたえる場所であるなら、ソウルでの取り組みは、朴景利文学を世界へ送り出す仕事だといえる。

『土地』は韓国人の人生と歴史を描いた作品だが、そこに盛り込まれた人間の欲望と愛、家族と葛藤、戦争と植民地支配、生存と死という問題は普遍的なものである。したがって、翻訳を通じて世界の読者に正しく紹介されれば、『土地』は韓国を代表する国民文学にとどまらず、世界文学として読まれる可能性を秘めている。

なぜ私たちは、朴景利が生まれてから100年が経った今も、彼女を記憶しなければならないのだろうか。それは、『土地』が単なる昔の出来事を扱った歴史小説ではないからだ。朴景利の作品には、人間はどのように生きるべきなのか、という根本的な問いがある。

貧しくても、人間は尊厳を保てるのか。

権力や金銭を前にして、人間はどれほど自由でいられるのか。

歴史の暴力のなかでも、人間は幸せを見つけられるのか。

すべてを失ったあとも、再び生きていく力はどこから生まれるのか。

『土地』に登場する数多くの人物たちは、これらの問いに一つの正解を与えない。その代わりに、それぞれが欲望し、愛し、裏切り、許しながら生きていく。

だからこそ、朴景利文学の中心には、結局のところ生命がある。彼女にとって生命は抽象的な哲学ではなかった。人間と自然、土と木、動物と人間が互いに支え合って生きる世界への信頼だったのである。人間が自然を征服し、思いのままに消費できるという考えに対しても、彼女は早くから警鐘を鳴らしていた。

人工知能や先端技術が人間の暮らしを急速に変えている2026年、朴景利の生命思想がかえって新たな意味を持って読まれるのも、ここに理由がある。

統営では、作家のルーツが探られた。原州では、『土地』が舞踊と音楽によって新たな姿を得た。ソウルでは、『土地』を英語に翻訳し、世界の読者に届ける取り組みが始まった。そして釜山では、月刊誌『市民時代』第501号で「朴景利生誕100周年特集」が企画・刊行された。

そのすべての道の出発点には、1926年に統営で生まれた一人の少女がいる。100年前、統営で生まれた朴景利が、やがて韓国現代史の壮大な物語を書き綴ることになると、誰が想像できただろうか。

朴景利は、戦争と貧困、家族の死、そして個人的な苦痛を経験した。しかし、苦痛に屈するのではなく、それを文学へと変えた。個人の悲しみは人間への憐れみとなり、その憐れみは『土地』という壮大な生命の世界となった。

だから、朴景利生誕100周年を記念するということは、著名な作家の誕生日を覚えておくことだけを意味するのではない。一人の人間が時代の苦痛にどのように耐え、その苦痛をどのように文学と生命の言葉へと変えていったのかを、あらためて考えることである。

生誕100年。朴景利はこの世を去ったが、『土地』の人々は今も生きている。

「それでは、あなたはこの世界をどのように生きていくのか。」

もしかすると、それこそが2026年の私たちが朴景利をあらためて読むべき、最も大切な理由なのかもしれない。

『市民時代』2026年10月号

朴景利生誕100周年特集②

朴景利生誕100周年、ハドン26土地研究会がつなぐ「暮らしのなかの文学」

――読み、歩き、分かち合い、演じながら、『土地』を人生へとつなぐハドンの人々

カン・ソンホ ハドン26土地研究会

2026年は、小説家の朴景利先生が生まれてから100年を迎える年である。大河小説『土地』の主要な舞台である慶尚南道ハドン郡平沙里には、本を共に読み、その物語を日常生活のなかへ持ち帰る人々がいる。ハドン26土地研究会の会員たちだ。

会員たちは、小説に登場する道を歩き、登場人物が食べた料理を作って分かち合い、作品に描かれた花や木を庭で見つめる。心に残った文章を筆で書き写し、登場人物を絵に描く。ある日には、自ら登場人物となって台詞を読み、舞台に立つこともある。

「26」という名に込めた思い

ハドン26土地研究会という名前には、三つの意味が込められている。

一つ目は、朴景利先生が1926年に生まれたこと。二つ目は、『土地』を1969年から1994年まで、26年にわたって執筆したこと。そして三つ目は、作品の文学的価値と読書文化を、さらに力強く「離陸」させようという決意である。

研究会は2022年9月28日に設立発起の活動を始め、今日まで活動を続けてきた。定期的な集まりから始まった交流は、文学紀行や作品展示、筆文字や文章を書く活動、国内外の読者との交流、舞台公演へと広がっていった。

しかし、この研究会を最もよく表しているのは、活動の一覧よりも、会員たちが共に定めた方向性である。

会員たちは、集まっても『土地』の話ばかりをしているわけではない。この一か月をどのように過ごしたのかを尋ね合い、食事を分かち合いながら、互いの日常を気にかける。

本よりも人が先にあり、研究よりも暮らしが先にある。

共に読むということは、本についての知識を分かち合うことであると同時に、隣に座る人がどのような思いで生きているのかを知ることでもある。

同じ場面から、それぞれの人生を読む

『土地』は、一人で読み通すのが簡単な作品ではない。数多くの人物が登場し、平沙里から晋州、ソウル、間島、満州、日本へと、物語の舞台も広がっていく。

激動する歴史のなかで、登場人物たちが出会い、別れていく長い物語を追っていると、途中で本を閉じてしまうこともある。そこで会員たちは、一か月間に読む分量を決めて読み進め、集まって心に残った場面や人物について語り合う。

2025年6月、ハドン本屋の茶室に会員13人が輪になって座ったときも、そうだった。

「チェ・チスがクチョンを取り逃がしたあとに見せた微笑みには、どんな意味があるのでしょうか。」

ある会員が投げかけた問いから、話し合いが始まった。ある人はその微笑みに懐かしさを読み取り、別の人は複雑な人間関係のなかで感じた安堵だと解釈した。同じ文章を読んでいても、心に届く意味はそれぞれ違っていた。

ユン氏夫人の人生について語ると、それぞれが歩んできた家族の記憶が重なってくる。イムイネの子どもたちが飢えのなかで「泣かない方法」を身につけていく場面では、感情を抑えて育たなければならなかった子どもたちの苦労を思う。

小説の人物を理解しようとして始まった対話は、いつの間にか、身近な人々や自分自身の人生を振り返る時間へと変わっていく。

「タンウン」「クグロ」のように、今ではあまり使われなくなった韓国語も、話し合いのきっかけになる。意味を調べ、知っている用例を持ち寄っていると、言葉に刻まれた暮らしの記憶までたどることになる。

誰が正しい解釈を示したかよりも大切なのは、ほかの人が読んだ『土地』に耳を傾けることだ。一人では通り過ぎてしまった文章の前で、仲間と一緒に立ち止まる。それが、共に読む楽しみなのである。

本を閉じ、道と庭へ出る

本のなかの場所が気になれば、実際に訪ねてみる。会員たちは晋州や慶州、南原など、『土地』にゆかりのある場所へ文学紀行に出かけた。

2026年4月には南原を訪れ、作品に描かれた場所と東学との関係をたどりながら、朴景利文学の生命思想へと考えを広げた。

同年9月には、会員8人が晋州を訪れた。南城堂教育館で三・一独立運動、少年運動、衡平運動に関する資料を見ながら、妓生キファとなったポンスン、学生運動に参加したキム・ヨンホ、衡平運動とつながるソン・グァンスとその息子ヨングァンのことを思い浮かべた。

小説のなかで出会った人物たちが、実際の都市の歴史と重なり合った。

南江のほとりでは、持参した台本を取り出した。それぞれが役を受け持ち、声や表情を使いながら台詞を読んだ。机に向かって読んでいた台詞を、川の前で声に出して読むと、感じ方が違った。

人々が暮らしていた場所、歴史が通り過ぎていった街路、そして目の前を流れる川が、作品をもう一度読み直させてくれた。

私たちが読んだ物語を、ほかの人々と一緒に歩いてみよう。その思いが、道という形になったのである。

大河小説『土地』の舞台を歩く

土地ゆかりの道を歩く地図

一人で歩くための案内

朴景利の小説『土地』の舞台であるハドン郡平沙里を歩いてみる。朴景利文学館や、小説の主要な登場人物たちが暮らした場所を巡り、平沙里の田園風景や周辺の山裾の村々、そして蟾津江を眺めながら歩く、魅力的な散策路である。

第1コース｜路地をたどる道 駐車場 → 水車 → 平沙里広報体験場 → 崔参判邸 → 土地市場 → 文学＆生命館 → 韓屋ホテル → 朴景利文学館

第2コース｜村道をたどる道 朴景利文学館 → 立石村 → 正西村 → 花史別墅 → 翠澗林

第3コース｜水辺をたどる道 翠澗林 → 岳陽川堤防道 → 平沙里公園 → キャンプ場 → 蟾津江堤防道 → 三岩 → 東亭湖 → 駐車場

岳陽と平沙里に整備された「土地の道」にも、こうした思いが込められている。崔参判邸からサンピョン、テチョン、立石、サンシン、正西村を通り、翠澗林へと続く道だ。

兄弟峰の稜線と平沙里の田園風景を眺めながら歩き、作品を紹介する案内板の前で足を止める。ソヒとキルサン、ヨンイとウォルソンのことを思い浮かべていると、自分も小説の一場面に入り込んだような気持ちになる。

私たちが読んだ物語を、ほかの人々と一緒に歩いてみよう。その思いが、道という形になったのである。

文学と出会う場所は、村道だけではない。会員のイ・ジョンヒさんは、10年にわたって自分の庭に『土地』に登場する花や木を植えてきた。

ノウゼンカズラやザクロ、ツツジやオキナグサ、バショウやアジサイを眺めながら、作品に登場する人物や場面について語り合う。

庭を巡ったあとは、小説に登場するカボチャの葉の煮込み料理「ホバクプルデギ」やハドンのお茶を分かち合うこともある。

花を眺め、料理を味わうという感覚的な体験が、本のなかで読んだ文章を新たによみがえらせてくれる。

読者が舞台の登場人物になる時間

2025年11月、岳陽生活文化センターの舞台に、研究会の会員と地域住民17人が立った。公演のタイトルはミュージカル『土地』だった。

最初から本格的な舞台公演を目指していたわけではない。本を読みながら心に残った名場面や名台詞を、自分たちで演じてみようという思いから始まった。

小説の主要な内容から九つの場面を選び、歌や朗読、踊りを加えた。ポンスンとソヒ、キルサンの幼い頃から、ヨンイとウォルソンのかなわなかった愛を経て、最後の解放の瞬間まで、物語をつないでいった。

小説をそのまま舞台に移すのではなく、日常的で喜劇的な要素も加え、会員と地域住民が一緒に楽しめる公演に仕上げた。

舞台に立った人々は、プロの俳優ではなかった。普段から一緒に本を読み、村で顔を合わせていた隣人たちが、ソヒになり、キルサンになり、ウォルソンになったのである。

目で読んでいると通り過ぎてしまう言葉も、自分の口で声に出し、身振りをつけようとすると、あらためて読み直さなければならない。

なぜその人物はそのような言葉を口にしたのか。どのような思いで相手を見つめていたのか。そうしたことを考えるようになる。

本を読んでいる間、心のなかに思い描いていた場面が、人々の声を得た。公演は、作品を別の方法で読む時間となった。

海を越えて出会った読者たちと、歴史と平和を語る

2026年5月22日、平沙里の崔参判邸の母屋の庭に、韓国と日本の『土地』の読者たちが集まった。

日本語版『土地』全20巻を刊行したクオンの関係者や翻訳者、日本の読者会の会員、韓国文学の翻訳者、報道関係者らが参加した。ハドンでは、研究会の会員をはじめ、ハドン郡や朴景利文学館の関係者が一行を迎えた。

日本の読者が『土地』を読むということには、自分たちの歴史と向き合う過程が伴う。作品には、日本帝国主義と日本の植民地支配期に韓国人が経験した苦痛が描かれているからだ。

日本の読書会を率いる山岡ミキロさんは、作品に描かれた日本の暴力的な歴史を受け止めることは容易ではなかったものの、その批判に正面から向き合うことで、反省と変化も可能になるという趣旨の考えを述べた。

また、朴景利という作家を、日本人が自らを振り返るきっかけを与える「厳しい母親のような存在」と表現した。

この日、研究会の会員たちは、自分たちで作ったミュージカルの一部の場面を披露した。ヨンイとウォルソン、クィニョとカン・ポス、ソヒとキルサンが、声と身振りを通して生き生きとよみがえった。

「人が人を見下すようになると、天使も悪魔になってしまうのです。」

公演のなかで語られたこの台詞は、人間を尊重するとはどういうことなのかを、あらためて考えさせた。

同じ作品を読んだからといって、それぞれが歩んできた歴史や経験まで同じになるわけではない。むしろ、異なる読み方をせざるを得ない部分を、共に見つめることに、この出会いの意味があった。

韓国と日本の読者たちは、一つの作品を間に置いて、痛みを伴う歴史と人間、そして平和について語り合った。

交流は国内でも続いている。2025年2月には、昌原の『土地』読書会と研究会の会員ら約30人が岳陽生活文化センターに集まり、作品や活動について語り合った。原州の『土地愛の会』との交流や、全国各地にある朴景利文学ゆかりの場所を訪ねる活動も続いている。

本を通じて結ばれた関係は、平沙里からほかの都市へ、そして海を越えて日本へと広がっている。

一杯のご飯から、再び『土地』を開く

2026年8月15日、会員たちは「土地の日」を共に祝い、「平和ビビンバ」を作った。

『土地』が解放の瞬間をもって幕を閉じ、朴景利先生が長い執筆を終えた日も8月15日であるという縁を、あらためて心に刻む集まりだった。

それぞれがビビンバに入れる材料を一つか二つずつ持ち寄ることにした。ある人はモヤシを、別の人は違う種類のナムルを持ってきた。

何も持ってこなくても構わなかった。ご飯とコチュジャンがあれば、一緒に食べればいいということだった。

異なる材料が一つの器のなかで調和する姿は、考え方も、それぞれが生きてきた時間も違う人々が囲む食卓に似ていた。

朴景利先生を記憶するということは、作品を保存し研究することだけではない。本のなかで見つけた問いを、今日の暮らしへと持ち帰ることでもあるだろう。

『土地』には、貧困や差別、植民地支配のなかでも、愛し、争いながら、最後まで生き抜く人々がいる。彼らを読むことで、今、そばにいる人にどのように接すればよいのかを考えるようになる。

本を読む。

誰かの話に耳を傾ける。

道を歩く。

花を植える。

一緒にご飯を食べる。

歌を歌う。

文字を書き、絵を描く。

舞台に上がり、登場人物になってみる。

そして、再び本を開く。

ハドン26土地研究会は、こうした何気ないことを共にしながら、『土地』をより多くの人々と読み、平沙里が作品の舞台であることを地域の人々と分かち合おうとしている。

文学を受け継ぐということは、本のなかで見つけた価値を、今日という一日のなかで実際に生きてみることでもある。

朴景利生誕100周年を迎えた2026年、平沙里では今も人々が『土地』を読んでいる。

最後のページをめくったあとも、出会いは終わらない。村道や庭、舞台や食卓で、再び物語を語り合う。

そうしてハドン26土地研究会は今日も、『土地』の次のページを共に書き続けている。

『市民時代』2026年10月号

朴景利生誕100周年特集④

日本へ渡った朴景利の『土地』

日本語版全20巻完訳、10年にわたる文学的な大事業

編集部

植民地の苦しみを記録した韓国の大河小説が、日本の読者の心を動かしている。2026年、朴景利生誕100周年を記念して慶尚南道ハドンで開かれた日韓読者交流行事は、文学が歴史の傷を越えて二つの国を結びつけることができると示した。

植民地の苦しみを描いた小説『土地』、「植民地支配国」の読者と出会う

韓国文学史において、朴景利（パク・キョンリ、1926〜2008）ほど壮大な文学世界を築き上げた作家は、そう多くない。代表作『土地』は、単なる長編小説ではない。朝鮮王朝末期から日本の植民地支配期を経て解放に至る激動の歴史を背景に、数百人の登場人物が織りなす韓国人の人生と運命、愛と憎しみ、自由と抑圧を描いた一大叙事詩である。

その『土地』が、いま日本へ渡った。それも抜粋翻訳や抄訳ではなく、全20巻を余すところなく日本語に移した完訳版である。この事実には特別な意味がある。『土地』が描く歴史の中心には、日本による朝鮮の植民地支配があるからだ。

韓国人にとって日本の植民地支配期は民族的苦難の歴史である。一方、日本人にとっては、自分たちの祖先が加害者の立場にあったという、向き合うことの容易ではない歴史でもある。

ところが今、日本の読者たちが、まさにその歴史を描いた小説を読んでいる。しかも、全20巻を読み終えたあと、もう一度読み返す読者まで現れている。日本各地で読書会が結成され、作品の舞台である慶尚南道ハドン郡平沙里を実際に訪ねる文学紀行も行われている。

2026年は朴景利生誕100周年である。彼女を記念するさまざまな催しのなかでも、特に注目すべきなのは、日本で始まった『土地』を読む活動が、日韓両国の民間文化交流へと発展していることだ。

朴景利が生涯をかけて探究した人間の尊厳と生命、自由という問題が、国境を越えて新たな読者と出会っているのである。

10年にわたる挑戦、日本語版『土地』全20巻の誕生

『土地』は1969年に執筆が始まり、1994年に完成した大河小説である。朴景利は実に25年をかけて、この作品を書き上げた。

これほど巨大な作品を外国語に移すことは、単なる翻訳作業を超え、もう一つの創作にも近い仕事である。

『土地』には慶尚道の方言や土地に根ざした表現、儒教的な慣習や身分秩序、農村の生活文化、東学農民革命や日本の植民地支配期の歴史的事件などが複雑に絡み合っている。韓国人の読者にとってさえ容易ではないこの世界を、日本の読者にも理解できるように訳すことは、実に困難な挑戦だった。

その挑戦に取り組んだのが、日本の韓国文学専門出版社クオンを率いるキム・スンボク代表と、翻訳者の吉川凪、清水知佐子である。

キム代表が2014年に翻訳を提案したことから事業が始まり、翻訳者たちは2015年から本格的に作業に取りかかった。日本語版は2016年から刊行が始まり、2024年に全20巻の完訳が実現した。

翻訳チームは、作品の歴史的背景や風俗を正確に理解するため、韓国の主要な舞台となった場所を実際に訪ねることもあった。

単に韓国語の文章を日本語に置き換えるのではなく、韓国の人々の暮らしと記憶を日本語で再現しようとしたのである。

2026年6月29日にソウルで行われたインタビューで、吉川凪は、この膨大な作品を日本の読者が理解できるようにするため、全力を尽くしたと説明した。清水知佐子も、読者たちが作品に描かれた人々の人生のなかに普遍性を見いだしていると語った。

こうした努力は、国際的にも認められた。

2024年、日本語版『土地』の完訳事業は、第43回世宗文化賞の国際文化交流部門で大統領賞を受賞した。2025年には、日本の権威ある出版賞である第79回毎日出版文化賞を受賞した。

さらに2026年6月29日、李熙健日韓交流財団は、キム・スンボク代表と二人の翻訳者に第2回李熙健賞を授与した。日韓の学術・経済・文化交流への貢献が認められたもので、賞金3,000万ウォンも贈られた。

韓国の文学作品を日本語に翻訳する仕事が、韓国と日本の両国で高く評価されたのである。

ここで注目すべきなのは、翻訳の規模だけではない。日本の読者が、韓国人の視点から韓国の近現代史を読むことができるようになったという事実こそ、より重要である。

かつて日本人は、朝鮮の植民地支配について、主に日本の歴史教育や歴史叙述を通して学んできた。しかし、『土地』は彼らにまったく異なる世界を見せてくれる。

植民地支配を受けた人々が何を失い、どのような苦しみを経験し、どのように生き延びたのかを、文学的想像力を通じて体験させるのである。

歴史書が事実を伝えるものだとすれば、小説は、その事実のなかを生きた人間の心を見せてくれる。ここにこそ、『土地』を日本語で完訳した真の価値がある。

日本の読者約30人、『土地』の故郷・平沙里を訪ねる

2026年5月22日から24日にかけて、慶尚南道ハドン郡岳陽面一帯で、意義深い催しが開かれた。朴景利生誕100周年と『土地』日本語版完訳を記念する「日韓『土地』読者交流行事」である。

日本から約30人の『土地』読者が韓国を訪れた。翻訳者や監修者、報道関係者なども参加した文学紀行の一行だった。

一行を迎えたのは、ハドンの朴景利文学館や地域住民、そして『土地』を愛する韓国の読者たちである。

この行事は、単なる観光旅行ではなかった。小説を読みながら想像していた場所を実際に歩き、作品に登場する料理や文化を体験し、韓国の読者たちと文学的な感動を分かち合う特別な旅だった。

初日の5月22日には、岳陽面の崔参判邸で歓迎行事が開かれた。日本語版の翻訳者と監修者の3人に感謝状が贈られ、地域の「土地26研究会」が準備したミュージカル公演も披露された。

崔参判邸は、『土地』の出発点であり、物語の中心舞台でもある。小説のなかでチェ・チス、ユン氏夫人、ソヒ、キルサンなど、数多くの人物の運命が絡み合う場所だ。

日本の読者たちは、本のなかで読んだ崔参判邸を実際に目の前にすることで、小説の世界と現実の風景を結びつけることができた。

翌23日には、さらに多彩なプログラムが行われた。『土地』に登場する料理や花を体験し、東亭湖を訪ね、ハドンのお茶文化に触れる茶園ツアーにも参加した。

上秋林出版とハドン本屋を訪問し、蟾津江の月見プログラムにも参加した。

最終日の24日には、花開市場を見学したあと、慶尚南道梁山市の平山書房へ移動し、ハドンでの日程を終えた。

この行事が特別だったのは、小説を読むという行為が、実際の人と人との出会いへとつながった点にある。

かつて日本人が朝鮮半島を訪れた歴史は、植民地支配と深く結びついていた。しかし、2026年に日本人が平沙里を訪れた理由は、まったく異なっていた。韓国の文学を理解し、その文学を生み出した人々の歴史と文化を学ぶためだったのである。

この変化は小さなことのように見えるかもしれない。しかし、決して小さなことではない。

一世紀前の日韓関係が、力と支配の論理によって動いていたとすれば、今日の平沙里で実現した出会いは、理解と尊重、そして自発的な文化交流の可能性を示している。

日本で始まった『土地』完読運動

『土地』の日本語版完訳がもたらした最も印象的な成果は、日本の読者たちによる自発的な読書運動である。

2025年1月から、日本各地に住む約15人の読者がオンラインで集まり、毎月『土地』を1巻ずつ読み、議論する読書会を運営している。

2026年6月末現在、彼らは第16巻まで読み進めていた。読書会では、会員が順番に発表を担当し、作品に登場する人物や歴史的背景について話し合う。全20巻を二度読み通した読者もいるという。

こうした事実は、2026年6月29日に韓国を訪れた日本語版翻訳チームへのインタビューを通して明らかになった。

清水知佐子は、日本の読者が『土地』を読むことで、韓国人の視点を通じて日本の過去を新たに見つめ直すようになると説明した。

その言葉のなかで、特に注目すべき表現がある。

「ああ、私たちはこんなことをしていたのか。」

これは、日本の読者が『土地』を読みながら感じる歴史的な自覚を凝縮した言葉である。

日本の読者たちは、物語の壮大な構成や劇的な展開に魅力を感じる一方で、そのなかに描かれた普遍的な人間の生き方にも共感しているという。

『土地』には、善良な人々だけが登場するわけではない。貪欲な地主や卑劣な人間、権力を追い求める人、恋愛に失敗した人、貧困や抑圧のなかでも尊厳を守ろうとする人々が共に生きている。

こうした人間模様は、韓国だけに存在するものではない。日本にも、中国にも、世界のどの国にも存在する。

日本の読者が『土地』に共感するのは、韓国の歴史を学ぶことだけにとどまらず、そのなかに自分自身の人生と人間の普遍的な運命を見いだすからなのだろう。

東京の小さな出版社から始まった文学外交

『土地』日本語版完訳の立役者であるキム・スンボク代表の歩みも、忘れてはならない。

キム代表は1991年に日本へ渡って学び、2007年に日本で韓国文学専門出版社クオンを設立した。2015年には、東京に韓国の本を紹介する書店兼文化交流空間「チェッコリ」を開いた。

ここでは韓国文学の翻訳出版だけでなく、日韓の作家同士の対話や出版関係者の交流、韓国文学を紹介するさまざまな催しが行われてきた。

2015年に『土地』の日本語版刊行計画が明らかになった当時、成功を確信することは難しかった。日韓関係が悪化し、日本では嫌韓書籍が注目を集めていた時期だったからだ。

当時、出版社が見込んでいた事業費は約1億円に上った。市場規模や販売の可能性を考えれば、非常にリスクの大きな挑戦だった。

それでもキム代表は、日韓関係の政治的な状況に左右されることなく、韓国の優れた文学を日本の読者に紹介するという意思を曲げなかった。

こうして始まった挑戦は、10年を経て実を結んだ。

2024年10月には、朴景利の故郷である慶尚南道統営で、日本語版完訳を知らせる記念行事も開かれた。2025年のハドン土地文学祭では、キム代表を招いたブックトークが行われ、日本語版刊行への功績をたたえる表彰牌も贈られた。

国家間の文化交流は、政府が主導する大規模な行事から始まるものだと考えがちである。しかし、『土地』の日本進出は、それとは異なる道を示している。

一人の出版人の情熱、翻訳者たちの粘り強い努力、そして本を愛する読者たちの自発的な参加が、国境を越えた文化交流の新たな道を切り開いたのである。

もしかすると、これこそが最も長く続く文化外交なのかもしれない。

朴景利の文学世界――自由と生命の哲学

朴景利の『土地』が日本の読者にまで感動を与える理由を理解するには、作品の哲学的な世界を見つめる必要がある。

『土地』の中心には、人間の生命と尊厳、そして自由の問題がある。

主人公チェ・ソヒの人生は、そのことを象徴的に示している。ソヒは幼い頃、家の没落と家族の死、財産の喪失を経験する。しかし、自分の運命を他人に委ねることはない。

間島へ渡ったソヒは、新たな人生を切り開き、奪われたものを取り戻すために粘り強く努力する。彼女の人生は、単に財産を取り戻す成功物語ではない。不幸な環境にあっても、自分の人生の主人公であろうとする人間の意志を描いた物語なのである。

光復後も、歴史認識や領土、外交問題をめぐって、日韓両国の対立は繰り返されてきた。

では、文学はこうした歴史的な対立を解決できるのだろうか。

もちろん、一つの小説が複雑な外交問題を解決することはできない。過去の過ちをなかったことにすることも、歴史的責任を肩代わりすることもできない。

しかし、文学には政治や外交が容易には実現できない特別な力がある。相手の立場から世界を見つめさせる力である。

『土地』を読む日本の読者は、植民地支配の歴史を日本という国家の視点だけから眺めることが難しくなる。韓国人がどのような苦痛を経験し、その時代をどのように生き抜いたのかを、一人ひとりの人間の人生を通して理解するようになるからだ。

同時に、韓国の読者も、『土地』を読む日本人の真摯な姿勢に触れることで、今日の日本人すべてを過去の加害者と同一視してはならないということを考えることができる。

そうした意味で、2026年に開かれた日韓『土地』読者交流行事は、小さくとも重要な歴史的意義を持っている。

これからは『土地』を韓国人だけの文学的財産としてとどめるのではなく、世界の人々が共に読む作品へと発展させていく必要がある。

そのためには、日本語版完訳の成果を土台として、ほかの言語圏への翻訳や出版を支援するとともに、海外の読者が作品の歴史的背景を理解できるよう、多様な資料を提供する必要がある。

また、ハドン郡平沙里、統営、原州、ソウル、釜山など、朴景利の人生と作品にゆかりのある地域を結び、国際的な文学紀行プログラムを発展させることもできるだろう。